

## 人物描画法テストの妥当性の検討

……過去5年間(1983—1987)の文献の紹介を通して……

明治鍼灸大学 人文・社会学教室

多田 建治

### Validity of the Draw-a-Person Test :

### A Review of the Literature published between 1983 and 1987

TADA Kenji

*Department of the Humanities and Social Sciences, Meiji College of Oriental Medicine.*

---

**Key Words:** 人物描画法テスト Draw-a-person test,  
人物描画法テストの妥当性 Validity of the draw-a-person test.

#### I 緒 言

人物描画法テスト (Draw-A-Person Test, 以下DAPと略記する) は、臨床家によって用いられる主な心理テストの一つであり、施行方法が簡単で、時間的、経済的に節約できる便利なテストである。

Goodenough, F. L.<sup>1)</sup> の Draw-A-Man Test (DAM) と、Koppitz, E. M.<sup>2)</sup> の Human Figure Drawing と、Machover, K.<sup>3)</sup> の Drawings of the Human Figure は、それぞれ、教示の仕方、適応年齢、結果の処理、採点、解釈などで、多少異なるが、ここでは、それらを包括して人物描画法または人物描画法テスト (DAP) として扱うこととする。

Goodenough の DAM 以外は、標準化の観点から、テストとして不十分な面もあるが、臨床的には貴重なデータとなり得る可能性があり、米国では臨床の場で重要だと思われるテストの第7番目

にあげられている。(Wade et al. 1978)<sup>4)</sup>

DAP は、知能や精神発達を測る Goodenough の方法と、精神分析的観点からパーソナリティーを診断するための Machover の方法と、その両者を統合的にとらえようとする Koppitz の方法にわけられるが、3つの方法はそれぞれ適用年齢も異なるので、DAP の妥当性については、対象となる被験者の年齢要因をつねに考慮する必要があると筆者は考えている。日本では、DAP の研究はさほど多くなく、心理テストの研究として少ない方であり、妥当性に関しても従来疑問視され、肯定的にはみられていないようである。学会などの発表でも樹木画の方が充分研究されているし、最近では家族画、動的家族画などが注目されている。

この論評では、米国と日本における過去5年間 (1983—1987年) の DAP に関する論文を通読して、その妥当性を検討することを目的としている。

また、それぞれの論文が、どういう実験計画であるか、どういう観点から人物画をとり扱っているか、どういう被験者を対象としているかなどについて類別して、DAPの研究の紹介と動向を調べることも目的としている。

## II 手 続 き

米国の文献については、DAPに関する論文がこれまで掲載されていたことのある、Journal of Personality Assessment, Journal of Clinical Psychology, Journal of Consulting & Clinical Psychology, Perceptual & Motor Skills, Psychological Bulletin, American Journal of Mental Deficiency などの雑誌、及び Journal of Personality, Journal of Personality & Social Psychology の雑誌について、1983年から1987年までの目次に目を通してDAPに関する論文を選び出した。

その他一応、Psychological Abstract (1984—1986まで、1987、1988は欠く) 誌のDAP、描画法の項目によりDAPに関する論文を選び出したがその中で入手できるものはなかった。入手出来なかったがDAPに関する論文を掲載していると思われる雑誌に次のようなものがある。Academic Therapy (1985), Social Psychologist (1983), Journal of Learning Disabilities (1985), Learning Disabilities Quarterly (1983), また、米国以外のもとして、British Journal of Projective Psychology & Personality Study (1983), Psychologie Française (1984)。

日本の文献については、心理学研究、教育心理学研究、心理学評論、特殊教育学研究、心理臨床学研究、臨床心理学研究、芸術療法、精神神経学雑誌、心身医学、精神医学、臨床精神医学 (いずれも1983—1987まで)、精神薄弱児研究 (1983—1985)、発達のおくれと教育 (1985—1986)、犯罪心理学研究 (1983—1985、1987) 等の学会誌、機関誌、日本心理学会発表論文集、日本教育心理

学会発表論文集 (いずれも1983—1987)、また、京都大学教育学部図書室に所蔵されている全国約200余りの国公立、大学、短大、研究所の紀要 (いずれも1983—1987、ある年度の欠けるものもある) の目次を見て、DAPに関する文献を選び出した。

なお一部、人物画をとり扱っているHTPテストの論文や、芸術療法や心理臨床学研究に掲載されている絵画療法の論文については、範囲が広くなりすぎるので今回は省略することとした。

## III 米国でのDAP研究

DAPによる情緒障害、精神障害の評価の妥当性については、1981年の Falk, J. D.<sup>5)</sup> の論文でそれ以前のものについて、よくまとめられている。DAPを基にした情緒障害の診断について、sorting task (DAPを用いて患者群と正常者群とを分ける) の場合、幾つかの研究は妥当性がないという結論であり、それより数は少ないが幾つかの研究は妥当性があるという結論である。また判定する場合に、artistic quality (絵のうまさの要因、或は、絵画的、美的技術の要因というべきもの) の問題が絡んできて正確な判定が難しいという論文が多い。しかしこれは、DAPを判定の道具として用い、また、これまで多くの研究は青年～成人を対象にしているからであって、今後は子供を対象にした様々の研究がもっとなされるべきであり、DAPは診断や予後の補助的な情報をもたらす、診断テストバッテリーの一つとして重要であると述べている。

米国で1983年から1987年の間に出版され、筆者が入手できた18の文献を対象年齢別に分けると、幼児、児童を対象とした論文は7編であり、1編は発達の事例的なもの、2編は学習、認知を扱ったもの、1編は自己概念と行動評価との関係を扱ったもの、3編は人種的、社会経済的な問題を扱ったものである。Falk が期待したように、子供を対象とした研究は多くはない。一つの理由として考えられるのは、子供を対象とした場合、Goodenough の方法、つまり、知的精神的発達を

DAPにより測定しようとする方法は過去においてかなりなされていて、この点に関してはかなり妥当性があると認められているからである。

Miljkovitch, M. & Landry, S. (1984)<sup>6)</sup>の論文は、白人の一人の少女が、4歳から10歳までの間に自発的に描いた絵のうち、人物画が213枚得られたが、それを発達的に分析したものである。その結果、DAPは発達を予測する良いテストであることがわかった。この研究は方法的に問題があり、いわゆるDAP即ち心理テストとして行ったのではなく、自発的な描画を扱ったものだが、自発的に描かれた人物画もDAP同様にスコアリングが出来て、利用出来ることがわかった。また子供の人物画は発達とともに人物画得点はかなり動揺するので、一回の描画で得られた資料から、IQや知的成熟を診断することは危険であると述べている。

Ottenbacher, K. et al. (1984)<sup>7)</sup>は、40人の学習障害児(4歳~12歳)に、DAP及び知能テスト、物理療法士による運動と姿勢の機能の評価、Southern California Postrotary Nystagmus Test という眼球振盪の測定を行った。学習障害児では、小脳一前庭機能に障害のあるものが幾分あり、そうした障害をもつ子供は眼で追跡する機能や、空間に関係した姿勢をとる機能に障害があり、また運動言語、読書の障害などが特徴である。またこうした子供は身体イメージの発達が悪く、DAPの発達もよくないだろうという仮説のもとに調べた。テスト結果を回帰分析した結果、DAPを説明する変数として、年齢要因が最も大きく、年齢をコントロールすると、後方回転性眼振の要因が大きくなり、IQや性の要因は少ししか寄与していないことがわかった。そして仮説である学習障害児の前庭機能の障害が、認知的一知覚の一運動的作業に影響して、DAPの得点を低くすることが検証された。

Saracho, O. (1984)<sup>8)</sup>は、男女同数240人ずつの、小学1年生と3年生を対象として、子供の場依存一場独立の認知スタイルとDAPとの関係を調べるため、DAP及び、Embedded Figure

Test, Articulation of the Body Concept Scale の3種のテストを行った。その結果、DAPは場依存一場独立を評価する信頼出来る道具であることがわかり、これは他の研究結果とも一致していて、DAPは認知的成熟度を測るのに適していることがわかった。

Spiga, R. et al. (1986)<sup>9)</sup>は、37人の5~6歳の黒人の子供に、DAPとBrown-IDS Self Concept Reference Test を行なった。また教師に子供たちの行動評定をしてもらった。その結果、教師の評価よりも自分で自らをより好ましく評価している子供は、DAPでの情緒指標が多くみられた。これらの子供たちは社会的承認の欲求を強くもっているが、実際には教師からそれが得られないので、DAPに情緒的問題が反映されるものと考えられた。

Pfeffer, K. (1984)<sup>10)</sup>、Pfeffer, K. & Olowu, A. (1986)<sup>11)</sup>及び、Pfeffer, K. (1987)<sup>12)</sup>はナイジェリアの心理学者で、ナイジェリアの8歳児を対象に、DAPに表われる人種的同一性、或は、人種的葛藤や、社会経済的地位の影響を調べた。その結果、ナイジェリアの子供達はアメリカでの黒人の子供達のように、顔や身体に使用する色彩で人種的葛藤を示すことが少なかった。しかし、Pfeffer, K. (1987)<sup>12)</sup>では、教示を通常の方法から「あなた自身を描きなさい」という形式に変えることによって、顔や身体、とくに髪の毛の色に黒っぽい色を多く使用して人種的問題を示した。DAPでの教示がいかに大切であるかを示したともいえよう。Pfeffer, K. & Olowu, A. (1986)<sup>11)</sup>の結果では、中流の子供は下層の子供よりもDAPのすべての基準で秀れていた。DAPによるこうした社会学民族学的、文化人類学的研究はDAPの研究の1つの方向を示唆するものであり、今後比較文化的な研究を通してDAPのより一層の解明がなされることが期待できる。

以上、幼児、児童を対象としたDAPの研究は殆んどが仮説どおり検証されていて、年齢をコントロールすれば、幼児、児童を対象としたDAP

はかなり有効な心理測定のための道具であると言える。今後さらにDAPに反映されるパーソナリティーの様々な側面の1つ1つが解明されるものと思われる。

青年、成人を対象としたDAPの論文は11あり、そのうち2編は論評であり、1編は実施方法の問題、3編はスコアリング・システムや解釈、artistic quality をとり扱ったもの、また、3編は非行や衝動性の問題に関したもので、あとの2編は、児童虐待者のパーソナリティー特徴と、将来の病気や健康との関係を扱ったものである。

Daum, J. (1983)<sup>13)</sup>の論文は、攻撃的暴力的な非行青年100人、逃避的な非行青年100人、どちらにも属さない非行青年100人と、正常者100人に対して、DAPを実施して、DAPと行動的特徴との関係を調べたものである。その結果、情緒的指標としてとりあげられている16の指標のうち、6つが上記のグループを分ける指標として有意に見出された。怒った肩は攻撃的な非行群の特徴であり、顔の中のある部分の省略、腕の省略、はっきりしない容貌の3つは逃避的な非行群の特徴として検証された。

Oas, P. (1984)<sup>14)</sup>、Oas, P. (1985)<sup>15)</sup>はDAPに表現される衝動性の臨床的有效性妥当性を調べた。Oas, P. (1984)<sup>14)</sup>は100人の精神疾患患者群と114人の中学高校生を対象にして、DAP、BGテスト、衝動性を測るための Matching Familiar Figure Test, WISC-RまたはWAIS-R、観察された衝動的行動を測る Behaviour Rating Scale、衝動的な非行行為を調べる Impulsive Behavior Checklist と多種のテストを行い統計的処理をした結果、MFFT、BRS、IBCの衝動性を測る3つのテストは一貫して高い相関を示し、これによって分けられた衝動的な群と非衝動的な群は、DAPやBGの衝動性の指標、非衝動性の指標で非常に正確に判別できた。つまりDAPの衝動性-非衝動性の指標の妥当性が検証された。DAPの衝動性の有

効な指標は描画行為と非常に関連しており、完成までの時間、全体の描画の質やバランス、不連続性、細部を描くことの欠如、省略、攻撃性などがあげられている。

Oas, P. (1985)<sup>15)</sup>は1984年の論文の被験者に非行青年群33人を加え、DAP、MFFT、BRSを実施した。その結果DAPの衝動性の指標(点数化)で3群の衝動的な者が93%の正確さで判別された。この衝動性指標の点数が意味するところは、被験者が臨床的に彼の衝動を相対的にコントロールし難いことを示すわけだが、これは彼の自己統制の認知力を評価しているわけで、非行行動のような行動的問題がこれによって予測されるわけではないと述べている。

Johnston, F. & Johnston, S. (1986)<sup>16)</sup>は児童虐待者(青年と成人)33人と、統制群42人を対象として、DAPを施行し、評定者3人により15の尺度で評定してもらった。そして11の信頼出来る指標が得られた。児童虐待者群は、性的同一性の問題を示す性の分化(男性像と女性像の分化)、回避傾向を示す眼の欠如、全体の描画の質などで仮説どおり統制群との間に差がみられた。仮説で理論的に期待された、女性への恐れを意味すると思われる「女性像を男性像より大きく描く」ことでは有意な差がみられなかった。また、青年の児童虐待者で攻撃性をあらわすとされる「鋭い目つき」も指標として信頼出来るほどの結果が得られなかった。虐待者群の特徴として、描画の全体の質が乏しいことがまずあげられ、因子分析した結果でも第1因子として見出されている。この原因として教育程度の要因も考えられるし、個人的特性としてみられるとも考えられ明確なことはわからないという結論であった。

Shaffer, J. et al. (1986)<sup>17)</sup>は581人の医大生が在学中に描いたDAPと20年以上後の健康状態や11の疾患タイプ及び死亡との関連を調べた。DAPの分析には描画全体の質を採点する Sophistication of Body Concept measure と、描画の42の特徴について調べる Conventionality/Deviancy measure を用いた。分散分析、重回

帰分析などの統計的処理をした結果, Conventionality の得点において, 健康群と非健康群, 精神疾患群とそうでない群, 心筋梗塞の経験のあるか否か, 良性腫瘍の経験のあるか否か, 十二指腸潰瘍の経験のあるか否かの間で有意差がみられた。しかし DAP での Conventionality / Deviancy の測定が後の健康状態を予測する実際の価値をもつということは, まだ確定的には言えないという結論であった。

次の3つの論文はそれぞれ, スコアリングシステム, 解釈者のパーソナリティー, artistic quality の研究であり, DAP の本質的な問題にかかわる, また妥当性の問題に直接関係する重要な論文である。

Shaffer, J. et al. (1984)<sup>18)</sup> の論文は前述した Shaffer, J. et al. (1986)<sup>17)</sup> と同じ医大生の描画758人分を資料としたものである。スコアリング・システムの3つの方法, 1) 物理的計測(身体各部の大きさなど), 2) Sophistication of Body Concept Scale, 3) Conventionality Scale により計測された値を因子分析した結果, 1) の方法では68.2%の分散が第1因子で説明出来, 2) の方法では65.1%の分散が第1因子で説明出来, 3) の方法では42.6%の分散が第1~第8の因子で説明出来た。これら3つのスコアリング・システムでDAPのスコアリングに内在する殆んどの変数をとらえていると考えられ, これら3つの方法を用いて包括的に分析することが必要であるという結論であった。

Scribner, C. & Handler, L. (1987)<sup>19)</sup> は, DAP の解釈には指標や基準などの量的な合理的なアプローチと, 一方, 臨床家のパーソナリティーに影響される, より感情的共感的なアプローチとがあり, DAP の投影法の道具としての有効性はそれを用いる個人の機能の問題に帰するかもしれないという考えから, 個人の対人的親和的な要因が解釈の正確さとどう関係するかを調べた。3人の患者によるDAPを対象として, 66人の大学生が被験者(許定者)であった。DAPを

描いた3人の患者にはパーソナリティーを調べるためのチェックリストを行ってもらった。被験者については患者のパーソナリティーの投影としてDAPを見て, 患者のパーソナリティーを正しく解釈したかどうかの観点からDAPの解釈得点が出された。また被験者にはMMPIと, 親和的・非親和的な傾向を調べるための Interpersonal Check List が実施された。その結果親和的な対人的スタイルをもつ人はDAPにおける共感的(直観的)アプローチでの正確さに対応し, 非親和的なスタイルをもつ人が共感的アプローチをすると不正確になるという結果であった。DAPを「直観的に読みとる」ことは人格のより深い根源的な層を知ることになり, 臨床的には有効性を増すわけだが, それには解釈者自身に, 権威的命令的, 正確さを求めるあり方でなく, 知的な統制をとり去った共感的なあり方が求められることになる。

Feher, E. et al. (1983)<sup>20)</sup> の論文は artistic quality に関したもので, 32人ずつの患者群と正常者群のDAPを対象として, 臨床家16人が2群に分けられそれらを評価した。前もって artistic quality を使用しないように指示しても, 指示した群が指示しない群より artistic quality の使用を抑えることは出来なかった。つまり artistic quality の使用はDAPの評価の際の避けられない要因であり, DAPの欠点の1つであり, その分だけ妥当性が減ることになる。しかしこの欠点があるにもかかわらず, テストの妥当性はわずかりあり, 臨床家は患者の絵か正常者の絵かを偶然のチャンスより以上に正しく判断出来た。

Sims, J. et al. (1983)<sup>21)</sup> と, Handler, L. (1984)<sup>22)</sup> はDAPで測定できる不安の妥当性を検討した論評である。Simsらの論文はDAPに表わされる不安の指標について様々の文献をまとめたものであり, 実際のストレス状況での実験ではDAPの不安指標は増えるが, そうした状況不安とMASなどで測定される特性不安との区別をはっきりさせることが必要であり, また臨床家によるデータの積み重ねとノーマティブな研究と

の結合が必要であると、妥当性としては構成概念妥当性の問題をもっと明らかにしていくとDAPの有効性は増すだろうと述べている。

Handler, L. (1984)<sup>22)</sup>の論文は以前のHandler達の論文について Sims, J. et al. (1983)<sup>21)</sup>の論文の中で誤解されている面について述べたものである。Artistic quality をいかに統制するかという点と、精神的不安と外部的状況的不安とを見分ける点について、DAPと同時に自動車の絵を描かせることでこれらの問題は解決できると述べている。自動車の描画はDAPの場合のようにストレス（不安）状況をつくらないので、DAPに表わされた不安の指標と自動車の絵に表わされた不安の指標とを比較することで、臨床家には被験者のストレス（不安）の源がわかるだろうと言及している。

Levy, A. & Borowsky, E. (1986)<sup>23)</sup>の論文は男女20人ずつの青年を被験者として、コンピューターを用いたDAPと、伝統的な紙と鉛筆を用いたDAPと、方法的に異なる2つの施行法での比較であるが、2つの方法で有意な差はみられなかった。コンピューターを用いた具体的なやり方が筆者にはもう一つ解り難いし、分析の方法も難然としているように思われる。

以上米国の過去5年間の文献をふり返ってみると、子供を対象としたものは比較的結果が明確でDAPの有効性、妥当性が示されている。対象が青年、成人の場合では、artistic quality の問題や、また描画場面において生じるストレス、テスターとの関係で生じる防衛機制的描画上への反映などの要因がDAPの有効性・妥当性を低減せしめていると思われる。かつてよく研究された描画による診断、つまり sorting task としてのDAPの妥当性については、Feher, E. et al. (1983)<sup>20)</sup>の実験で行なわれていて、わずかな妥当性があるという結果であるが、DAPを用いて情緒障害、精神障害の診断をすることは、あまり妥当性のあるものでなく、危険を犯す誤りのある作業である。一方、特定の患者群や特定の問題行

動をもつ群のパーソナリティーを調べるためDAPを用いて統制群と比較する実験では、分散分析や多変量解析などの手法などにより、かなり有効性・妥当性が見出されている。

#### IV 日本でのDAP研究

本邦で過去5年間に出版された学会誌、機関誌、全国国公立大学、短大、研究所の紀要、心理学会、教育心理学会の発表論文集の中で、DAPそのものを研究した論文は9編、学会発表は7編であった。同一著者が同一テーマで紀要と学会誌、学会発表など重複している場合もあるので実数はさらに少なくなり、過去5年間における日本でのDAP研究は乏しいと言える。

とくに対象が青年、成人の場合は学会発表が3編あるのみである。日本では青年期以降のDAPの心理テストとしての妥当性の評価が低く、テストの有効性に否定的であるとはいえ、研究自体が米国に比べかなり遅れているとみななければならない。

宮川 (1987)<sup>24)</sup>の研究は、精神分裂病患者群63人と統制群として学生333人のDAPの手の部分を分類した。縦軸を構造上の分化の程度と形態の歪み、横軸を描き方（単純化の程度）と設定してかなりうまく分類している。両群の間で手の描き方に対する多少の差が見出されたが、統計的な検定がなされていないことや、男女の数の統制が未解決であり、今後統計的にきちんと整理出来ればDAPの解釈の上で有効な手がかりとなるだろうと思われる。DAPの特定の部分に焦点を当てたこのような研究は今後期待されるものである。

宇田川 (1983)<sup>25)</sup>の研究はDAPでの自我拡大と自我弱小を示す象徴的符号と、ロールシャッハテストのM、FM反応とを用いて、男子学生の人格発達が、拡張期—抑制期という交互運動をくり返すであろうことを検証しようとしたものであるが、問題意識が明確でなく、自我の拡張—抑制がどうして一年ごとに生じる必要があるのか筆者には解り難かった。

菅藤 (1985)<sup>26)</sup>は非行少年の事例研究でのDAP

の例を報告したが、DAPの指標の解釈が主観的で、指標のもつ一般的な解釈について言及すべきであると思う。

以上のように青年期以降を対象とした日本でのDAPの実験的、ノーマティヴな研究は殆んどなされていないような現状である。一方、心理テストとしてではなく、描かれた人物像の変化を何回にもわたって見ていこうとする絵画療法としての人物画は、臨床的事例研究として、安藤(1986)<sup>27)</sup>や石原、中西(1983)<sup>28)</sup>の論文で代表的に見られる。他にも探索すれば案外といろんな事例が見つかるかもしれない。しかしこれらの事例で扱っている人物画は、たまたま人物像が治療のプロセスの中で変化したから論文としてまとめられたわけであり、始めから人物画に焦点をあてて研究したわけではない。そういう意味で心理テストとしてのDAPの立場と幾分異なるようである。勿論、DAPの目指すところは、ノーマティヴな実験で得られたものが、臨床的事例の中でいかに意味をもって表現されるかという、臨床的に役立つことを目指しているものだが、現在の状況では、ノーマティヴなデータと臨床のデータとがうまく結びついていないようである。

次に幼児、児童を対象にした研究では、対象を幼児あるいは障害児としたものが殆んどである。

木船、深田(1983)<sup>29)</sup>の論文は、3～5歳児120名を対象として、実験群には各年齢群で、そのDAP得点の平均に10点分の項目を加えた、より発達した人物画を情報として呈示し、人物に関する情報を含まない風景画を情報として呈示した統制群とその情報呈示の効果について比較したものである。情報呈示直後、1週間後、1ヶ月後の3回にわたってDAPを実施した。その結果、情報非呈示群では事前測定時から1ヶ月後の測定時までの約5週間の間にDAP得点の変化が殆んどみられず、DAP描画水準の自然変動は生じていない。これに対して情報呈示群ではDAP得点が統制群に対して有意に増加し、一過的な人物情報の呈示によって、DAPの描画水準の大幅な上昇

がもたらされたことがわかった。この情報呈示効果は、呈示直後においても認められるのみならず、1ヶ月後においてもかなりの程度持続しており、その持続は、とくに年中児と年長児で顕著であった。この結果は、Goodenough, F. L. や Harris, D. B. らの「DAPは子供が自己のもつ人物についての概念、ボディ・イメージを表現する」という基本的仮説を疑わしめる結果であり、DAPの妥当性に対して批判的、否定的な結果であった。

飯高(1987)<sup>30)</sup>の研究は、2～5歳児120名に対してDAPと絵画語彙発達検査、身体部位検査を行い、幼児の身体部位の理解やDAPでのそれらの表現がどのように発達するかを調べたものであるが、DAPの発達は身体概念の理解や命名能力の発達よりもかなり遅れて発達することがわかった。

神田、吉川ら(1983 a<sup>31)</sup>, 1983 b<sup>32)</sup>, 1983 c<sup>33)</sup>)の研究は、神田、吉川ら(1983 a<sup>31)</sup>)の論文で代表されると思われるが、38人の幼児(平均年齢4～6歳)に対して、DAPと模写画(ウサギを擬人化した絵)をそれぞれ1年間隔で計3回実施し、その発達を検討したものである。その結果、DAPと模写画の相関は、年少、年中児ではかなりの相関がみられたが、年長児では模写画の得点の分散が小さくなったため、相関が低かった。また男女差については女子の方が年少で両者ともに得点が高かった。この研究は、木船、深田(1983)<sup>29)</sup>の結果から考えると、模写画を描かすことがDAPの発達を促すことになるので、DAPで一体何を測定しようとしているかが解らなくなってしまう。或はもつと分析のし方を工夫すれば興味ある結果が得られたかもしれない。

桜井(1984<sup>34)</sup>, 1986 a<sup>35)</sup>, 1986 b<sup>36)</sup>)の研究は厳密にはDAPではなく自画像描画であるが、人物画を枠づけ法で施行して、子供の有能感との関係を調べたものである。桜井(1984)<sup>34)</sup>では5～6歳児96名を対象として自画像描画を、枠づけ法、枠なし法の2つの施行法で行なった。また教師によって幼児の有能感や体格を調べる質問

紙5項目での評価が行なわれた。その結果、枠づけ法では自己の内面が自画像に投影されるという仮説どおり、自画像の大きさと、運動や学習に関する有能感との間に正の関係が見出された。また枠なし法の場合には、自己の外側が投影され易いという仮説どおり、体格と自画像の大きさととの間に正の関係が見出された。しかし自己価値と自画像の大きさについては正の関係は見出されなかった。

桜井(1986a)<sup>35)</sup>は同じ様な実験を11～12歳児75名に対して行なった。枠づけ法で実施された自画像描画と有能感測定尺度や失望感測定尺度により測定された有能感や失望感との関係が調べられた。その結果、頭の大きさと有能感のうちの自己価値との間に正の、失望感との間に負の有意な関係がみられた。

桜井(1986b)<sup>36)</sup>も同じ様な研究であるが、5～6歳児53名を対象に、枠づけ法による自画像描画と、心理学専攻の大学院生による児童への面接による有能感の評価との関係を調べた。その結果、自画像の大きさと学習に関する有能感との間に正の関係がみられた。しかし、運動に関する有能感との間には正の関係がみられず仮説は支持されなかった。これら3つの研究結果は相互にちぐはぐで一貫していないところがあり、著者も述べているように有能感測定の方法上の問題があるとみられる。また被験者の数が少ないことも影響していると思われる。

残りの5編は障害児を対象としたものである。

木船(1984)<sup>37)</sup>は6～12歳の脳性マヒ児64名を対象に、DAP、WISC-R、BGテストを施行し、それらの検査結果を分析してDAPの併存的妥当性を検討したものである。その結果、DAPは動作性知能と関係が深く、言語性知能とは有意な関係はなかった。重回帰分析によりDAPで測定するものの大部分はBGテストにより説明出来ることがわかり、DAPは視覚運動能力検査として位置づけられると述べている。

一門、山下(1983)<sup>38)</sup>は6～20歳(平均11.3歳)の自閉症児53名を対象に実施したDAPの結果を

分析している。自閉症児では描画不可能な者や、教示をわかり易くしないと描けない者が多かったが、描画可能群においても、MAで2歳程度発達の違いの低いレベルの絵を描き、MA相応のDAPが描けないという結果であった。また、全体の不均衡、手指の末梢部を描く者の少ないこと、衣服を描く者が少ないこと、パターン化した顔、ロボットや鬼などの怪奇な像や漫画的な像、性差の表面的な描出などの特徴が見られた。

畠山(1984)<sup>39)</sup>の研究は、2～11歳の普通児280名と、6～13歳の発達障害児31名(精神遅滞15、ダウン症2、CP11、自閉症3)に実施したDAPを身体比率の発達の変化の観点から比較したものである。その結果、普通児群では、3～5歳の幼稚園段階では3頭身未満の胎芽型、6～8歳の小学校低学年では3頭身の胎児型、9～11歳の小学校高学年では4頭身の幼児型という形式で発達することがわかった。一方、発達障害児群では31人のうち29人は3頭身以下の胎児型または胎芽型を示していた。発達障害児のDAPは頭部が大きく、胴体が小さいのが特徴であるが、全般的に下肢の表現が未発達で、こぶ状の突起で下肢を表わしている者や、殆んど下肢を省略した者もみられ、上半身が細部にまで発達がみられたりして比較的よく描かれているのに対して、下半身の萎縮傾向は著しい特徴を示している。また胴体部の表現に十字型や小字型が多く、幼稚園児の表現パターンの域を出ていないことであった。これらの結果は障害児の内面的な身体図式の未発達によるものではないかと述べている。

田辺、田村(1986<sup>40)</sup>、1987<sup>41)</sup>)いずれも精神遅滞児を対象としたものである。田辺、田村(1986)<sup>40)</sup>は12～15歳の23名の発達障害児(うちダウン症3名、自閉性4名を含む)を対象に、DAP及び図形模写課題を実施した結果、DAPの成績と図形模写能力との間に有意な相関を見出した。またダウン症児のDAPは自閉性障害児のDAPに比較して、全体のバランスで劣るが、発達の高次化に伴って各部の明細化が増し柔軟な人物画に発展するが、自閉性障害児のDAPは硬直

した同じパターンの描画になり易いという結果であった。

田辺、田村(1987)<sup>41)</sup>は6~15歳の精神遅滞児47名を対象にDAPとK式発達検査を施行した。その結果、DAPは田中の述べる二次元形成~三次元形成~三次元可逆という発達段階に相応して発達していき、K式発達検査での図形模写の課題及び、空間関係の把握能力を示す模様構成と階段再生の課題において、DAPの得点との間に関連がみられた。

その他、事例研究として、DAPのみではないがDAPを含めた描画の発達をとりあげた研究として、佐伯(1985<sup>42)</sup>、1986<sup>43)</sup>、1987<sup>44)</sup>及び、山形(1986)<sup>45)</sup>がある。佐伯の論文は、精神遅滞幼児の統合保育の中での発達の様子を事例的に見ていったもので、非常にくわしく書かれているが、DAPの結果の整理がきちんとなされていないので、統合保育の効果がDAPでどんな変化として表われているかが解り難く残念である。

## V 考察とまとめ

過去5年間の米国と日本におけるDAPの文献を紹介してきたが、それらを総括的にまとめてみると、

1. 米国でのDAPの研究に比べて日本でのDAPの研究は、論文数も少なく内容的にも貧弱である。日本の研究の多くは心理テストとしてではなく、幼児や障害児を対象とした発達を調べるための資料として研究している。それゆえにこれらの研究に対して妥当性を云々することは的をえない。しかし幼児の人物画の発達について、とくにKoppitz, E. がとりあげなかった5歳以前の発達については、まだ十分にわかっていない面もあるので、多くの資料が集積されることによりDAPが今後、幼児を対象とした心理テストあるいは心理学的テクニックとして成立するかどうかという妥当性に貢献する可能性がある。

2. DAPの妥当性にとり組んだ日本の論文はわずかに、木船、深田(1983)<sup>29)</sup>と木船(1984)<sup>37)</sup>のみであり、あと桜井(1984<sup>34)</sup>、1986<sup>35)</sup>、

1986<sup>36)</sup>が自画像の大きさのもつ意味の妥当性をとり扱っている。木船、深田の結果はDAPの知能測定、精神発達を調べるための道具としての妥当性に肯定的ではなかった。子供を対象としたDAPが人物についての概念や、ボディ・イメージを測定するものだという従来の考えを否定するもので、DAPはそれほどたいしたものを測っていないと、心理テストとしての価値を低減せしめるものであった。この研究にも批判すべき問題点があり、例えば、被験者の知能がわからないこと、また1ヶ月以降DAPの点数は増えるのか減るのか、一度上昇した点数が低下していく現象をどう説明するのか、また木船、深田の論文の中で情報呈示に際して、「口頭で名称、内容を指摘しながら」とあるので、その説明により身体概念の認知が促進されDAPでの得点上昇となったとも考えられる。多田、窪田(1980)<sup>46)</sup>の結果では、幼児のDAPは知能が充分あれば、ある発達の時期には短期間で非常に発達するものであるし、わずかのきっかけがあれば、それを手がかりとして、3~5歳児のDAPは発達が促進されるものである。

3. 米国では、青年期以降のパーソナリティーを調べるためのDAPでのスコアリング・システムが様々な人により作成されているようである。また従来客観性に欠けていると言われていたDAPの指標を実験して数量的に確かめようとする方向にある。また、不安、衝動性、自己概念、自己同一性、認知スタイルなどに関連させた多様な研究が行なわれている。今後、ロールシャッハテストのように、発達心理、知覚心理、文化人類学的立場などから様々な使い方がなされるのではないかと期待出来る。

4. DAPの実験的統計的に得られた研究結果がほんとうに妥当性をもつかどうかは、絵画療法などの事例研究にかかっていると思う。DAPの1つ1つの指標が事例でくわしく検討されることにより真に臨床的に役立つ道具となりうると思われ、そのためには、実験的統計的なアプローチと、事例研究的アプローチが相互交流の場をもち、

相互作用により統合されていく必要がある。

5. DAP の場合, Pfeffer の結果にみられるように教示のあり方が非常に大切であり, またテスト状況のあり方も大切である。解釈に際しては, 被験者の年齢, 性別, 人種, 社会的経済的要因, 両親の職業などの要因といった被験者のもつさまざまな要因や, 被験者のおかれている状況について, より多くの情報をとり入れて解釈を総合的に行う方向が望ましい。今後そう出来るような総合的なスコアリング・システムを作っていく必要があるといえよう。勿論, DAP のみでパーソナリティー診断を行うことは危険であり, その点については, 過去の多くの研究で実証されてきている。あくまでもDAPは診断の補助的一手段である。

## 文 献

- 1) 小林重雄: グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック, 初版, 三京房, 京都, 1~92, 1977.
- 2) Koppitz E M: Psychological evaluation of children's human figure drawings. Grune & Stratton, 1968. 古賀行義監訳: 子どもの人物画...その心理学的評価. 第2刷, 建帛社, 東京, 1~372, 1977.
- 3) Machover K: Personality projection in the drawing of the human figure. C C Thomas, 1949. 深田尚彦訳: 人物画への性格投影. 第4刷, 黎明書房, 名古屋, 1~170, 1979.
- 4) Wade T C, Baker T B, Morton T L et al: The status of psychological testing in clinical psychology: Relationships between test use and professional activities and orientations. *Journal of personality Assessment* 42: 3~10, 1978.
- 5) Falk J D: Understanding children's art: An analysis of the literature. *Journal of Personality Assessment* 45: 465~472, 1981.
- 6) Miljkovitch M, Landry S: Longitudinal study of a series of 213 spontaneous drawings of a person by a child between the ages of 4.6 and 10 years. *Perceptual and Motor Skills* 59: 387~393, 1984.
- 7) Ottenbacher K, Abbott C et al: Human figure drawing ability and vestibular processing dysfunction in learning-disabled children. *Journal of Clinical Psychology* 40: 1084~1089, 1984.
- 8) Saracho O N: The Goodenough-Harris drawing test as a measure of field-dependence/independence. *Perceptual and Motor Skills* 59: 887~892, 1984.
- 9) Spiga R, Mindingall M P et al: Effects of differences between self- and others' ratings on children's human figure drawings. *Perceptual and Motor Skills* 62: 956~958, 1986.
- 10) Pfeffer K: Interpretation of studies of ethnic identity: Draw-a-person as a measure of ethnic identity. *Perceptual and Motor Skills* 59: 835~838, 1984.
- 11) Pfeffer K, Olowu A: Effects of socioeconomic differences on the sophistication of Nigerian children's human figure drawings. *Perceptual and Motor Skills* 62: 771~774, 1986.
- 12) Pfeffer K: Effects of instructions to subjects on draw-a-person as a measure of ethnic identity. *Perceptual and Motor Skills* 64: 780~782, 1987.
- 13) Daum J M: Emotional indicators in drawings of aggressive or withdrawn male delinquents. *Journal of Personality Assessment* 47: 243~249, 1983.
- 14) Oas P: Validity of the draw-a-person and Bender Gestalt tests as measures of impulsivity with adolescents. *Journal of Consulting and Clinical Psychology* 52: 1011~1019, 1984.
- 15) Oas P: Clinical utility of an index of impulsivity on the draw-a-person test. *Perceptual and Motor Skills* 60: 310, 1985.
- 16) Johnston F A, Johnston S A: Differences between human figure drawings of child molesters and control groups. *Journal of Clinical Psychology* 42: 638~647, 1986.
- 17) Shaffer J W, Pearson T A et al: A possible relationship between figure drawing data collected in medical school and later health status among physicians. *Journal of Clinical Psychology* 42: 363~369, 1986.
- 18) Shaffer J W, Duszynski K R, Thomas C B: A comparison of three methods for scoring figure drawings. *Journal of Personality Assessment* 48: 245~254, 1984.
- 19) Scribner C M, Handler L: The interpreter's personality in draw-a-person interpretation.

- tion: A study of interpersonal style. *Journal of Personality Assessment* 51: 112-122, 1987.
- 20) Feher E, Vandecreek L, Teglassi H: The problem of art quality in the use of human figure drawing tests. *Journal of Clinical Psychology* 39: 268-275, 1983.
- 21) Sims J, Dana R H, Bolton B: The validity of the draw-a-person test as an anxiety measure. *Journal of Personality Assessment* 47: 250-257, 1983.
- 22) Handler L: Anxiety as measured by the draw-a-person test: A response to Sims, Dana and Bolton. *Journal of Personality Assessment* 48: 82-84, 1984.
- 23) Levy A J, Borowsky E I: Comparison of computer-administered Harris-Goodenough draw-a-man test with standard paper-and-pencil administration. *Perceptual and Motor Skills* 63: 395-398, 1986.
- 24) 宮川治樹: 描画法の研究 (I) …人物画・手部の質的分類. 日本教育心理学会第29回総会発表論文集: 552-553, 1987.
- 25) 宇田井一夫: 男子中学生の人格の発達変化…ロ・テストと人物画をもちいた縦断的研究. 日本心理学会第47回大会発表論文集: 483, 1983.
- 26) 管藤健一: 売春少女の描いた人物画に関する研究. *犯罪心理学研究* 22: 60-61, 1985.
- 27) 安藤 治: 離人症の精神療過程と描画…描画による身体-主体性の回復. *芸術療法* 17: 15-22, 1986.
- 28) 石原聖久, 中西昭憲: 人物画に描画変化がみられた対人恐怖者の1例…Synthetic house-tree-person 法を通して. *芸術療法* 14: 37-41, 1983.
- 29) 木船憲幸, 深田博己: 幼児の人物画知能検査に及ぼす人物情報の呈示効果. *教育心理学研究* 31: 38-43, 1983.
- 30) 飯高京子: 幼児の身体像の理解・命名能力と人物画の発達. 日本教育心理学会第29回総会発表論文集: 380-381, 1987.
- 31) 神田久男, 吉川政夫ら: 幼児の描画表現に関する縦断的研究 (II) ……2年間にわたる発達の推移及びその類型化による検討. 日本総合愛育研究所紀要 19: 175-186, 1983. (a).
- 32) 神田久男, 吉川政夫ら: 幼児の描画表現に関する研究IV…事例研究による2年間の推移. 日本教育心理学会第25回総会発表論文集: 206-207, 1983. (b).
- 33) 神田久男, 吉川政夫ら: 幼児の描画表現に関する研究V……2年間にわたる縦断的結果の検討. 日本教育心理学会第25回総会発表論文集: 208-209, 1983. (c).
- 34) 桜井茂男: 幼児における人物画の大きさと有能感および体格の関係……枠づけ法を用いて. *教育心理学研究* 32: 217-222, 1984.
- 35) 桜井茂男: 児童における人物画の大きさと有能感およびホープレスネスとの関係……枠づけ法を用いて. *筑波大学心理学研究* 8: 73-80, 1986. (a).
- 36) 桜井茂男: 幼児の有能感と自画像の大きさととの関係……枠づけ法を用いて. 日本教育心理学会第28回総会発表論文集: 370-371, 1986. (b).
- 37) 木船憲幸: 脳性マヒ児の人物画知能検査の併存的妥当性…WISC-R, ベンダー・ゲシュタルトテストとの関係. *特殊教育学研究* 22: 1-5, 1984.
- 38) 一門恵子, 山下 功: 自閉症児の対人認知について (I) ……人物画を通して. 熊本大学教育学部紀要-人文科学編- 32: 131-139, 1983.
- 39) 畠山三郎太: 発達障害児の人物画…Body proportion の発達の变化. 北海道教育大学旭川分校情緒障害教育研究紀要 3: 71-74, 1984.
- 40) 田辺正友, 田村浩子: 精神遅滞児の図形模写能力 (2) ……図形模写と人物画との関連. 奈良教育大学教育研究所紀要, 22: 23-32, 1986.
- 41) 田辺正友, 田村浩子: 精神遅滞児の人物描画における身体像の発達. *特殊教育学研究* 25: 49-55, 1987.
- 42) 佐伯栄三: 保育所における統合保育の効果に関する事例的研究 (3) ……精神遅滞児の描画特性. 宮崎大学教育学部紀要-人文科学編- 57: 77-
- 43) 佐伯栄三: 保育所における統合保育の効果に関する事例的研究 (4) ……精神遅滞児の描画特性. 宮崎大学教育学部紀要-人文科学編- 60: 53-
- 44) 佐伯栄三: 保育所における統合保育の効果に関する事例的研究 (5) ……精神遅滞児の描画特性. 宮崎大学教育学部紀要-人文科学編- 62: 35-
- 45) 山形恭子: 0才から3才までの描画の図式化過程…人物表象に関する分析. 日本心理学会第50回大会発表論文集: 472, 1986.
- 46) 多田建治, 窪田陽呂子: 精神薄弱児の人物画の発達について…普通児との比較. 金沢大学教育学部教科教育研究 15: 61-75, 1980.